

2 学年通信 No.22

2026（令和8）年 9月24日（木）
福山市立新市中央中学校

「平和だから野球もできる」

あっぱれ！

張本勲さんのメッセージを受け止めよう



プロ野球最多の通算 3085 安打を記録した張本勲さんが亡くなった。広島での被爆体験を基に平和や非核を訴え、在日韓国人 2 世として育った境遇と想いを語った。その言葉は静かで鋭かった。東映、巨人、ロッテなどで実働 23 年間に 7 度、首位打者に。通算の打率、本塁打、打点も歴代上位に並ぶ。

だが、この華やかな実績は表層にすぎない。4 歳の時、たき火へ利き手の右手から落ちて薬指と小指の 3 分の 2 を失い、残る 3 本も内側に曲がった。野球には致命的なけがだった。投げることは左手に代えて克服した。打撃は、左打者の軸となる右腕だけで素振りを含め、1 日 2000 回は振ったという。不可能を可能に変える意志が原動力だった。

韓国から移住した父は早くに亡くなり、一人で子どもを育てた母は日本語が十分でなかった。在日 2 世として突きつけられた差別や不条理を野球とともに乗り越えた。

5 歳の時、爆心地から 2.5 キロの自宅で、母がかぶさってくれて命を拾った。11 歳の姉は全身やけどで亡くなった。被爆体験を語り始めたのは還暦を過ぎ、原爆がどこに落とされたのかも知らない若者の声を聞いてからだ。

声なき声を代弁し続けた。そのメッセージを改めて受けとめたい。（朝日新聞 2026.9.12）

<学習しての感想より>

原爆の落ちた時の様子やお姉さんのことを聞いて、戦争は悲惨だと改めて思った。被爆者が少なくなって今、話を聞いた私たちが次の世代へも受け継いで、「もう起こさない、しない」ことを伝えていかないといけない。

「被爆者にとって死ぬまで戦争は終わらない」という言葉が印象に残っています。

今の私になにができるのかを考えていくことが大切だと思いました。

家族を失った悲しみを野球をすることで気持ちを入れ替えたのはすごいと思う。少し体調が悪いだけで原爆のせいかと不安な気持ちになるほど原爆の影響は人の心に残り続けるものだとわかった。

原爆によって姉を失い、ずっと原爆症を恐れていたと知って、心が重くなりました。「核兵器がなくなって死にたい」と言われていたが、今もなくすことができていない。私たちがこの思いを受け継いでいこうと思いました。

つらい思いから前を向いて野球を始められた。私も前を向いてがんばろうと思った。

小学生の女の子が張本さんに手紙を送ってその子の思いが伝わったので、やっぱり自分の思いを伝えていけばわかってくれる人がいるとわかりました。

張本さんがどれだけ苦しんでしんどかったか、私たちには、はかりしれないけど、張本さんが伝えた思いや苦しさを忘れずに、次の人へ伝えていくことが張本さんの願いに答えることにもなると思いました。戦争が終わった今でも、大切な人がいなくなった悲しみや原爆症の恐怖と闘っている人がいるという事実を考えさせられました。

原爆が落ちたときだけでなく、ずっと恐怖が残っているのが原爆のおそろしさだとわかった。

不可能を可能に変える強い意志、私ももちたいと思いました。